

# ソーシャルワーク実践の共通基盤と地域課題 ——個別支援から地域支援へ，地域支援から個別支援へ——

社会学部 4年 南 井 里 菜

<目次>

- |                               |                             |
|-------------------------------|-----------------------------|
| I. はじめに                       | (2) 事例の概要                   |
| II. 個別支援と地域支援における共通基盤         | (3) 分析と考察                   |
| (1) ソーシャルワークの統合化に至るまでの背景      | IV. 個人に寄り添うということ            |
| (2) ソーシャルワークの統合化              | (1) 各事例を通して考察する専門職としての視点    |
| (3) ソーシャルワークの共通基盤             | (2) 個別支援から地域支援へ，地域支援から個別支援へ |
| III. 様々な分野におけるソーシャルワーカーの支援の実際 | V. おわりに                     |
| (1) 研究目的と方法                   | 参考文献                        |

## I. はじめに

筆者には小学6年の頃からマザーテレサに非常に憧れて、彼女のように世界中の困っている人の力になりたいという夢があった。彼女のようになりたいと考え、社会福祉を学ぼうと考えた。最初は彼女の影響を受けて、国際関連の福祉の仕事をしたと考えていた。しかし、大学4年間で様々な経験をさせて頂き、国内の社会福祉に強い関心を持った。

まず筆者は福祉の視野を広げたいと思ったので、ホームヘルパー2級の資格を取得し、ガイドヘルパーのアルバイトを大学2年の頃から始めた。この頃は、地域支援について全く何も考えていなかった。そして同時期に、マザーテレサが活躍したというインドでの国際ボランティアに参加した際に、最も身近な国である日本について改めて考えさせられた。具体的には、日本

は平和なのか、日本には困っている人はいないのかという点についてである。さらに焦点化すると、筆者の住んでいる地域の住民の方々は幸せな生活を送れているのだろうか、最も身近な家族や友人などに困っている人はいないのかという点まで考えた。やはり、日本、そして筆者の住む地域にもたくさん困っている人はいるのではないかと気が付いた。身近で困られている1人1人のことを考えて、それから地域全体を見ていくことの大切さに気付き、地域支援に興味を持つようになった。筆者は3年時の社会福祉士実習では社会福祉協議会（以下、社協）に行かせて頂いた。ここでは社協の1人1人の住民に寄添ったり、住民主体に重点を置いていたり、協議の場を大切にしながら地域の福祉力を高めていこうとしたりするような、専門職の方々が大切にされている「価値」のことを学ばせて頂いた。地域支援という言葉はまだあまり理解されていないこともあり、地域支援は社協職員のみが行うことであると考えられがちだが、社協職員だけでなく福祉に関わる全ての人が理解しておくべきであると考えた。なぜなら、地域で活き活きと自分らしい生活を送りたいという個人のエンパワメントを高める上で「地域」という視点は必要不可欠だからと考えたからである。この実習で、個別支援と地域支援の繋がりについての理解が少し深まったように感じる。また、ガイドヘルパーのアルバイトで日中は地域の就労継続支援B型事業などで活き活きと働かされていて、休日はヘルパーと外出して余暇を楽しむというように、たくさんの方が地域で楽しそうに活き活きと生活されていると感じるようになった。ヘルパーのバイトでどの方も、「仕事、すごく楽しい！今の職場でずっと働きたい！」と話して下さることが非常に印象深く、住み慣れた地域で暮らしたいという思いを持つ人々に寄り添いたいという思いが強まった。またそんな中、東日本大震災が起き、被災者の方の少しでも力になることが出来たらと考え、被害が非常に大きかった宮城県石巻市を訪れた。そこで、被災されたAさんと何度もその方を訪れているベテランのボランティアの方の信頼関係を拝見し、復興に向けて共に新しい地域を作っていると感じた。結果、筆者は何も出来なかった。行く前は筆者の出来ることは被災された方の

話を聴くことであると思っていたが、Aさんは深い話などはされなかった。しかし、Aさんはベテランのボランティアさんには様々な相談等をされていた。そこで、1回関わっただけで信頼関係が構築できるわけがなく、Aさんの住む地域に携わり、継続して何度も関わっていくことが重要であり、求められる地域支援であると考えた。このような経験から個別支援や地域支援を行っているソーシャルワーカー（以下、SW）または精神医学ソーシャルワーカー（以下、PSW）が大切にしている共通基盤についてより深く考えたいと思い、このテーマを選んだ。

## Ⅱ. 個別支援と地域支援における共通基盤

本章では、ソーシャルワークの分野においてソーシャルワーク実践に実際に取り組まれた人物の理念や、ソーシャルワークの統合化の発展過程等について整理していきたいと思う。それを踏まえて、どの分野で働くSW又はPSWでも共通して大切にされていること、あるいは大切にしていかなければならない共通基盤（価値等）について探っていききたいと思う。

### (1) ソーシャルワークの統合化に至るまでの背景

このような歴史の背景から、1人1人の利用者と接しながら、ソーシャルワークの在るべき姿について見つめ直し、それに気付いていく過程を通して、ソーシャルワークは発展していった。この背景を基に、次に、ソーシャルワークの共通基盤が提唱された経過を、ソーシャルワークの統合化について言及しながら説明したい。

### (2) ソーシャルワークの統合化

ソーシャルワークの統合化とは、ソーシャルワークの共通基盤、とりわけその主要な3方法であるケースワーク、グループワーク、コミュニティワーク（オーガニゼーション）の共通基盤を明らかにして、一体化してとらえよ

うとする一連の動向のこと<sup>4)</sup>である。表1のミルフォード会議報告書（1929年）において、初めて「ジェネリック」という概念が登場し、統合化への先駆けとなるものであった。また、高齢者、児童、障害者等の各分野に共通している概念、知識、方法、社会資源等を、基本となる原理、過程、技術を示すソーシャルワークの形態を指す。ソーシャルワークの統合化の発展過程について、下記の図を参考にしながら述べていきたい。SWがクライアントへ

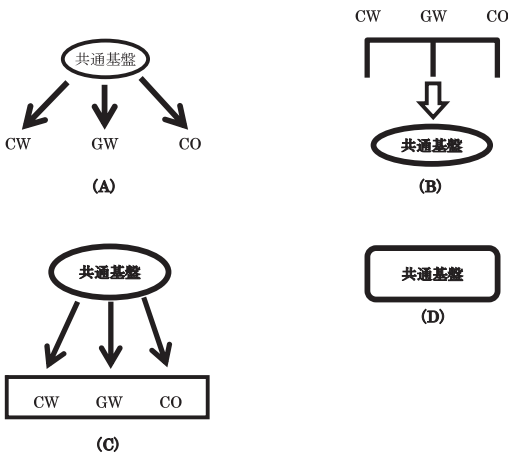
表1 ソーシャルワークの統合化の歴史

1800年代後半～1900年代：ソーシャルワークの基本的枠組みの構築の始まり
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ソーシャルワークの源流は、「貧困」であり、「貧困は個人の責任であり、社会は無関係」と言われていた。</li> <li>・自助互助の考え方が広まり、個々で貧困救済を行うのではなく、社会が一体となって組織化して取り組もうという考えになっていった。</li> <li>・M,リッチモンドは、「個人と社会の相互補完性」を提唱。 ⇒貧困は個人の責任というのではなく、社会の中の個人という捉え方が必要であり、貧困は社会の責任であるという内容である。</li> </ul>
1910年～1940年代：新たなモデルの誕生 診断主義と機能主義の対立
<ul style="list-style-type: none"> <li>・フロイトの診断主義 … 主に利用者の「過去」に焦点を当て、「援助者が利用者に働きかける」という考え方。この考え方は、利用者を「治療する」という傾向にあり、個人指向が強かった。</li> <li>・O,ランクの機能主義 … 主に利用者の「現在」に焦点を当て、「利用者が援助者に働きかける」「その人の力を引き出す」という考え方。</li> </ul> <p>この時期のソーシャルワークは、医学的であり、SWは「小さな精神科医」と言われていた。そこで、A,マイルズは「リッチモンドに帰れ」という声を挙げた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パールマンの問題解決アプローチ … 診断主義と機能主義も取り入れていて、2つの考え方を統合しようという考え。</li> <li>・1929年、ミルフォード会議<sup>1)</sup> → ジェネリック・スペシフィック概念 これにより、領域や分野ごとの専門性よりも、その共通部分が強調されるようになった。</li> </ul>
1950年～1970年代：新たなソーシャルワーク概念の模索
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミルフォード会議（1929年）により、H,パールマンの考え方や、システム論、生活モデルの考え方等を統合して、ジェネラリスト・ソーシャルワークという考えが強調されるようになった。</li> <li>・「過程」を考慮した援助関係の必要性が改めて認識された。</li> </ul>
1970年～現在：パラダイム転換 <sup>2)</sup> 在るべき姿のソーシャルワークの形に向けて
<p>システム論、生活モデルの導入による新たな過程認識され、「援助過程は人と環境を含めた生活のエコシステム的な過程」まで発展し、援助はSWが直接的に提供するだけでなく、クライアントの自助能力の促進からマクロ的な環境整備まで広範囲に渡るとされる。⇒より現在の考え方に近づいた。</p>

(注3)「相談援助の基盤と専門職」より筆者が作成

の援助内容に応じて、もっとも適切な方法を適宜組み合わせ活用しようとするものが下記の図Aであり、共通基盤が不明確であった。このような状態から、各方法論に共通する原理や技術を抽出することによって、共通基盤を確立させようとしたのが図Bである。さらに、専門職としてのソーシャルワークの共通基盤を確立した上で、そこから全体を特徴づける枠組みを再構築することをもって統合化とみなす統合形態をジェネラリスト・アプローチという。つまりこれは、上記に挙げた3つの方法が先にありきということではなく、まず共通基盤を理論的に成熟させるとともに、そこから立脚して各方法を捉え直そうとしているので、図Cでは共通基盤から下向きに矢印がついている。これにより、構造的な統合化に到達したと言える。そして、図Dでは、3方法はソーシャルワークとして融合し、それまでの共通基盤とも一体化している。これがジェネラリスト・ソーシャルワークである。

図1 ソーシャルワークの統合化



CW：個別援助技術（ケースワーク） GW：集団援助技術（グループワーク） CO：地域援助技術（コミュニティワーク）

（注5）「ジェネラル・ソーシャルワーク」より筆者が作成

### (3) ソーシャルワークの共通基盤

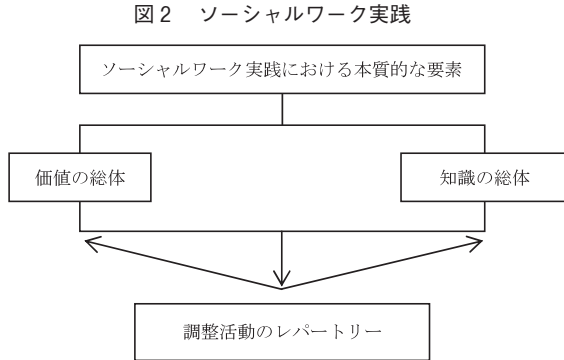
ここでは、ソーシャルワークの共通基盤について言及している、パートレットについて説明したい。パートレットは医療ソーシャルワークの分野で発展に努めた、アメリカの社会福祉学者である。その著書である『社会福祉実践の共通基盤』（1970年）において、社会福祉援助に共通する構成要素として、「価値」・「知識」・「調整活動のレパトリー」を挙げ、個別援助を統合的に捉えた。この3つの構成要素について1つずつ整理をしていきたいと思う。

まず「価値」についてである。パートレットは、「価値」において「潜在的可能性」と「成長」を挙げている。まず「潜在的可能性」とは、各個人の持っている発達への可能性を、生涯を通して最大限に実現することである。そもそも人間は、自ら選択し、除去し、集合し、決定し、それによって、様々なものを創造できる存在である。SWは、このような個人の「潜在的可能性」を価値として選択している。次に「成長」は、人間は絶えず成長していくことによってのみ個人は自分の持つ潜在的可能性を達成させることが出来るとしており、それと同時に強みを獲得すると説明している。

次に、「知識」についてである。「知識」は実証出来る経験を指しており、「価値」とは違って、経験的に実証出来るものであるとしている。SWらが、人々と関わって広範囲に渡る生活上の問題に対応していけるように援助していく過程で得た経験は、一般に「実践の知恵」として述べられている。つまり、「知識」は実践の中に埋もれている。

さらに、「調整活動のレパトリー」についてである。これは、社会の変革を意識して、社会システムの構築、もしくはその過程の部分に対して向けられる、実践者の活動を呼ぶために、専門職としてなされる行為であるとした。このような専門職の行為は、ソーシャルワークの「価値」、「知識」を意識的に用いることによって導かれて遂行され、また「価値」、「知識」が優先されるという概念と一致すると述べている。パートレットは、これまでに述べてきた3つの共通基盤を図2に表している。実践者を導くのは「価値」と

「知識」であり、実践者達が関わっている状況に影響を与えるのは「調整活動方策」を通してである。



(注6) 『社会福祉実践の共通基盤』より筆者が作成

図2においてパートレットは次に述べる4点について示している。1、我々はこれによって、ソーシャルワーク実践を全体として理解することが出来る。2、本質的な要素が、「価値」、「知識」、及び「調整活動」という明確な総体から構成されていることを示している。これらの要素は、もはや個別な方法のなかに埋もれたり、分割されたりしない。3、「価値」と「知識」が優先されるべきであることを示している。4、ソーシャルワーク自体の経験（調整活動）から学んだものがソーシャルワークの「知識」と「価値」の総体にフィードバックし、絶えず「価値」と「知識」の総体を豊かにしていくことが示されている。

このように、パートレットは上記の3で述べているように、ソーシャルワーク実践において「価値」と「知識」に重点を置いているが、筆者が特に重点を置くべきであると感じるのは、「価値」であるように思う。そのように感じる理由は、ソーシャルワークの基本的価値について述べている、デュボスとミレーまたはストレーンの基本的価値を挙げながら、説明したいと思う。まずはそれぞれの基本的価値を以下のようにまとめた。

◆デュボスとミレーによるソーシャルワークの基本的価値

①個別性の尊重 ②秘密の保持 ③専門職としての行為 ④尊厳と価値 ⑤社会正義 ⑥非審判的態度 ⑦倫理的な態度 ⑧資源へのアクセス ⑨自己決定 である。

◆ストレーンによるソーシャルワークの価値として一致して確認されている7つの価値

①クライアントの社会的・心理的・政治的な傾向、性、人種、年齢といったものにも関わらず、人の存在の尊厳と価値に対する信念を守る。②変化する人間存在の能力への信頼。③クライアントの自己決定。④クライアントやクライアントシステムをユニークなものとして受容。⑤自助の能力の発達や回復を支援。⑥クライアントの参加の支援。⑦クライアントのエンパワメントを図り、相互作用しているパートナーとして受容する。

(注7)「ソーシャルワーク論I」講義録より筆者が作成

デュボスとミレー、ストレーンに共通している「価値」は、人の存在の尊厳と価値を尊重するということ、自己決定、または専門職としての行為として、受容、クライアントの参加やエンパワメントの支援、非審判的態度、秘密保持、倫理的支援等である。また、デュボスとミレーは「資源へのアクセス」についても基本的価値として捉えている。これはソーシャルワークの支援の対象が個人のみではなく、視野を広げて、支援の対象を地域へと拡大し、ネットワークの構築についての重要性を述べていると考える。

このように彼らの述べているソーシャルワークの基本的価値は、専門職としてソーシャルワーク実践を行う際に、ぶれてはならない軸となっていると考え、ソーシャルワーク実践を行う際には度々再確認そして実践後の振り返りを行うべきだと考えた。よって筆者は、「価値」に重点を置くべきであると考えた。バートレットが述べたソーシャルワークの共通基盤、デュボスとミレー、ストレーンが述べたソーシャルワークの基本的価値を基に、次章では、実際の業務を行うSW又はPSWに関する事例を挙げ、ソーシャルワークの共通基盤や大切にしている「価値」について考察を深めたいと思う。



### Ⅲ. 様々な分野におけるソーシャルワーカーの支援の実際

この章では、実際に筆者がSW実習及び、PSW実習において理解したソーシャルワーク実践の共通基盤について、述べていきたいと思う。

#### (1) 研究目的と方法

共通基盤について実際にソーシャルワーク実践を行っている場面を通して、専門職の働きかけ等を考察しようと考えた。研究目的は、様々な分野や場所で働くSW及びPSWが支援を行う際に大切にされている、共通基盤についての理解を深めることである。

研究方法に関しては、実習においてSW、PSWの方の業務に同行させて頂いたり、職員の方や利用者の方からお話を聴かせて頂いたりした。その中で筆者が特に専門職の視点が理解しやすいと判断した3つの事例を選定し、それを基に考えていきたいと思う。

#### (2) 事例の概要

**事例1** 精神科病院にて。

研究方法：PSWの方からお話を聴く。

精神科病院医療福祉相談室のPSW（現在は他部署のPSW）は、約30年長期入院をされていたBさんを担当していた。Bさんには兄弟がおらず、甥が月に2回程、相談室に面談に来られているとのことである。ある日その甥が、「何故叔父は入院しているのか？」とPSWに尋ねられたようだ。PSWは、その甥の言葉を聴き、Bさんに「退院して何かしたいことはあるか？」と聞くとBさんは、「退院して自分がもともといた家周辺で暮らしたい。」と話されたという。PSWは、「何故もっと早くこの事を話してくれなかったのですか？」とBさんに聞くと、「誰も聞いてくれなかったから。けれど、聞いてくれる人がいて良かった。」と話されたという。PSWは、Bさんの退院に向けて、退院促進事業<sup>8)</sup>を利用し、外出支援をしている際に、Bさんは、自宅付近

の公園を見て、「この公園懐かしいなあ。この地域に戻ってきたと思うわあ。」と話された。PSWは、Bさんの自宅があった地域周辺の社会資源を把握していたそうだが、このようなBさんの発言を聞いて、「地域へのイメージがBさんと自分とは違うことが分かった。」と話されていた。またPSWは、「それと同時に自分が把握していた社会資源のネットワークが使えないということに気付き、新たにBさんと構築していく必要がある。」と思われたという。最終的にBさんは、退院促進事業を利用し始めてから1年程度で退院し、現在はグループホームで暮らされている。

**事例2** 地域活動支援センターにて。(以下、地活)

研究方法：PSWの方からお話を聴く。

地活の通所理由としてMさんは、「対人関係の構築」を目標として設定されている。そんなMさんが、「電車に乗るのが怖い。」と話されていたという。そこで、PSWは「何で怖いと思うの?!」と聞かれたそう。すると、「学生服を着た高校生の集団が自分のことを何か言っているような気がして怖い。」と話された。そこで、PSWは、高校生のような生徒が、精神障がいに対する正しい知識を習得出来るように、教育機関に働きかけ、まずは学校の教師や教育委員会に精神障がいに対する正しい知識を知ってもらうために、講演に行くことにしたとのことだった。また、精神障がいについて知ってもらいたいという思いを持つ当事者のIさんは、当事者活動を積極的に行っており、高校生の頃に発病したこともあり、Iさんの体験談は非常に学生に響いているという。PSWは、体験談を行う前日や、予定をたくさん入れてしまい、しんどくなってしまいう傾向にあるIさんに対し、週に1回面接を行いながら、Iさんの抱えている不安や思いを受け止め、整理をされていた。さらにPSWは、教育機関に精神障がいに対する知識を提供すると同時に、教育機関にも精神的な病を抱えている人は増え続けていることもあり、気軽に相談するように提案されていたという。

**事例3** 子育てサロンにて。

研究方法：社会福祉協議会（以下、社協）の社会福祉士の業務に同行する。

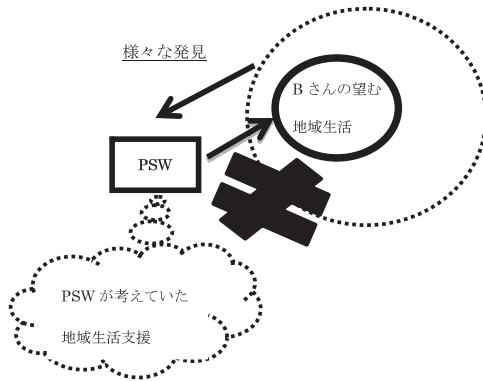
社協での実習で、児童委員・福祉委員の方が中心に行っている子育てサロン（以下、サロン）に参加させて頂いた。社協のSWは、市内の図書館の地域交流広場を抑え、そこで児童委員・福祉委員の方がサロンをしやすいように場所取りをされていた。サロンに参加している子ども達は自由のびのびと遊んでおり、また子どもの保護者の方々は、互いに会話を楽しんでいる場面が見られ、サロンの場は子ども同士の交流はもちろん、保護者の方同士の交流の場でもあった。その際に社協の職員の方は、子どもやその保護者の方々と直接関わるというよりも、児童委員・福祉委員の方とたくさん会話をされており、細かい気配りや配慮を大切にされていた。また、子どもや保護者の方々と直接的に関わられているのは、児童委員・福祉委員の方であり、具体的には子どもに絵本を読んだり、一緒におもちゃで遊んだり、保護者の方々の話を聞いていたりされていた。サロンの場では、サロンに来られている子どもや保護者の方、さらには中心に行っている児童委員・福祉委員さんは非常に生き生きとしており、児童委員・福祉委員の方自身の生きがいの場、あるいは情報共有の場でもあった。

**(3) 分析と考察**

ここでは、3つの事例を図にまとめて整理をしていきたい。まず事例1を図に表すと、下記の図3のようになる。図3から分かるように、PSWが予め考えていた地域支援とBさんの望む地域生活は異なっている。図3ではこれをノットイコールで表した。もちろん社会資源を把握し、それと繋がっておくことは大切だが、まずはBさんと信頼関係を構築した上で、Bさんの地域生活に対する考えや思いに寄り添っていく必要があるだろう。PSWはBさんの望む地域生活を支援の核とすべきと考えており、図3では線の濃い円の中に「Bさんの望む地域生活」を示した。また、PSWがBさんに関わるこ

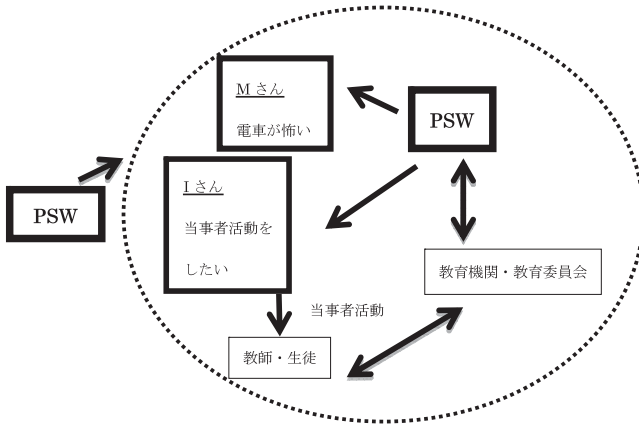
とで、Bさんの住む地域性が分かったり、地域の課題が見えてきたりという「様々な発見」がある。これにより、PSWは地域とのネットワークを構築することが出来たり、支援の対象をBさんの住む地域を支援対象とすることで介入し、よりBさんを含めた誰もが暮らしやすい地域を構築したり出来る。この様子を点線の円で表現した。この事例で、支援は個別支援が前提として行われていて、そこから支援対象を地域へと拡大していることが分かる。

図3 事例1について



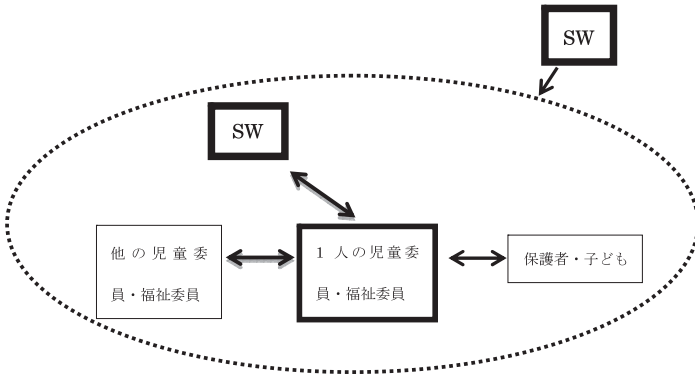
次に事例2を図に表すと、下記の図4のようになる。図4から分かるように、当事者のMさん、Iさんという個人の声から、PSWによる支援が展開されていることが分かる。図4では、MさんとIさんの声を、太い線で四角に囲んだ意図は個人の声が核となり、支援が展開されているためである。また、図4でも個人の声からネットワーク構築や地域課題の発見に繋がっている様子を点線の円で表現し、PSWはここにも介入していくべきだと考えたので、点線の円の外側に矢印を入れた。さらに、PSWと教育機関・教育委員会は地域にある社会資源として、共に協力し合う意味から双方向に矢印が向いている。この事例でも、支援は個別支援が前提として行われていて、そこから支援対象を地域へと拡大していることが分かる。

図4 事例2について



さらに、事例3を図に表わすと、下記の図5のようになる。図5のように、1人の児童委員・福祉委員に注目してみると、他の児童委員・福祉委員やサロンの参加者である子どもや保護者の方等と繋がっていることが分かる。さらに、この1人1人の繋がりによって、地域が構築されていることが分かる。SWは、事例3の場面では、まずは1人1人の児童委員・福祉委員に支援の焦点を当て、各自が持っている地域福祉活動に対しての思いや悩み等を共有することを行うべきだと考えた。そのため図5には1人の児童委員・福祉委員を太い線で四角に囲んだ。さらに、それを個人間に留めておくのではなく、他の児童委員・福祉委員やサロンの参加者とも共有したり、協議を重ねたりして、より良い地域が構築されていく。SWはこの相互作用にも働きかけていく必要があると思うので、この相互作用や地域の様子を点線で表した。つまり、地域住民が主体となって地域社会を構築できるように支援する際に、個別支援が前提となっていることが分かる。この事例では、支援は個別支援が前提として行われていて、そこから支援対象を地域へと拡大していることが分かる。

図5 事例3について



#### IV. 個人に寄り添うということ

この章では、前章の3つの事例についてさらに整理をし、ソーシャルワーク実践の共通基盤について考察を深めたい。

##### (1) 各事例を通して考察する専門職としての視点

まず事例1では、PSWは、Aさんが退院後に何をしたいのかどんな生活を送りたいのか等についてAさんに聞き、それについて理解した上で、Aさんと一緒に生活を構築していくという過程を大切にしていることが分かる。つまり、決して支援者の考える型に本人を当てはめていくのではなく、PSWは自らが持っている価値観と相手の価値観の相違について理解し、相手の価値観を尊重した上で、支援を行うということである。よってPSWは、Aさんの退院後の地域生活に対する考えや思いについて寄り添っていく必要がある。地域に対する見方やイメージ、望んでいる生活の在り方は1人1人異なっており、個々と関わることで、PSWは新たな社会資源や地域性の発見をすることが出来る。また、このような個人が集まって、1つの地域が出来ているということに気付かされた。

次に、事例2にあるようにPSWは1人の精神障害者の声を聴いて、視点を教育機関等の地域に向けて、精神障がいに関する正しい知識を生徒や先生に知ってもらわなければならないと判断し、講演に行くという手段を取られたのだと理解した。またPSWは、当事者活動を進んで行いたいという思いを持つIさんに対し、Iさんが活動を行いやすくなるように面談を繰り返し、Iさん自身の環境を整えられていた。さらには、当事者活動を行う場所や地域への働きかけ等も大切にされていることが分かった。それと同時に、教育機関にも「何かあれば頼って下さい。」と働きかけることで、互助の関係を構築することができる。このような地域でのネットワークが構築されていくと、さらに1人1人が住みやすい地域へとなるだろう。1人の精神障がい者の方の声から、このように地域のネットワークが広がったということになる。PSWは、目の前の1人1人の精神障がい者の声を大切に、それに寄り添いながら地域課題の解決、さらには地域の向上に向けて働きかけるという姿勢が求められているように理解した。

さらに事例3から、児童委員・福祉委員の方のような地域住民が中心となって、サロンを運営することで、地域住民同士の支え合いが生じている。地域住民同士の関係が希薄化していると言われている現在において、再びかつてのように地域住民の繋がりを構築し、住民同士が互いに支え合うという関係性を構築することで、1人1人が暮らしやすい地域になっていくのだろう。社協のSWは、主体は地域住民であるということを意識され、この形態を構築するために、サロンには直接参加せずに、サロンの外部環境を整えるということに力を注がれていた。そうすることで、1人1人の児童委員・福祉委員の方自身の生きがいに繋がり、さらに、地域を引っ張っていかうという気持ちになるのではないかと考えた。

## (2) 個別支援から地域支援へ、地域支援から個別支援へ

ここでは、事例3つを踏まえて筆者の感じた共通基盤を図に表し、SW、PSWがソーシャルワーク実践を行う上で、大切にしているポイントを以下

のようにまとめたい。まずは、筆者の感じた共通基盤を、図1の用語を用いて以下の図6にまとめた。

図6 ソーシャルワーク実践における共通基盤

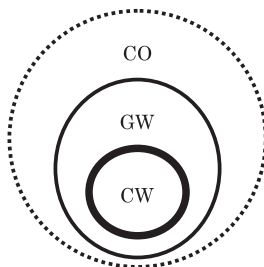


図6を踏まえて、事例上のSW、PSWがソーシャルワーク実践を行う上で、大切にしている共通基盤について4点を挙げたいと思う。

- ①利用者1人1人の声に耳を傾ける。
- ②その声を聴き、利用者の考えや思いに寄り添う。
- ③さらに、利用者の個別支援のみを行うのではなく、視野を広げて、支援の対象を地域へと拡大する。
- ④最終的には、利用者を含めた地域住民同士で互いに支え合う仕組みを構築する。

これらを踏まえてこれまでに何度も述べてきたが、筆者の考えたSW及びPSWがソーシャルワーク実践を行う上で大切にしている共通基盤は、「個別支援が前提として行われていて、そこから支援対象を地域等へと拡大していくこと」である。ポイントの①～③に挙げたように、個人に寄り添うことで見えてくる地域課題があるように思う。さらにそれと同時に、事例3の子育てサロンのような地域支援を行う上でも、社会福祉士は1人1人の住民の繋がり等を意識されており、個別支援を重視されていることから、先ほどの文の逆も言えると思う。つまり、「地域支援を行う上でも、個別支援が前提となっており、それを意識すること」も共通基盤の1つである。ポイント④で



は個人同士の繋がりにおいて、1つの地域が構築されていることを表している。これらにより、図6ではCWが円の中心となり太い線の円で囲み、これが全ての支援の核であることを表した。さらにはこのようにCWを行っていくことで、支援の幅を拡大することが出来、GW、COに繋がっていくと考え、線の太さを普通の太さと点線で表現した。

## V. おわりに

現在、2000年の社会福祉法の改正により、「地域福祉の推進」が法律上に位置付けられたが、地域福祉の推進とは具体的にどういうことなのか。地域支援とはどういうことなのかということそれぞれの実習中に考えさせられた。一般的には地域支援とは、地域住民の組織化や、地域の社会資源の構築、支援を必要とされている方の見守り活動やサロン活動、地域住民の理解を得るための活動等である。このように地域福祉は幅が広く、SW又はPSWの業務は膨大であるだろう。

しかし、そもそも地域とは、1人1人の個人が集まって成り立っているものである。つまり1つの地域の源流となっているものは、個人である。このように上記に挙げたような福祉サービスが構築されたのも、1人1人の声であるのではないか。地域福祉の推進を行っていく際には、地域は個人で成り立っているということを忘れてはいけない。

また、個人個人で地域生活において抱えている思いや考え、生活を送る中でやりたいこと等は異なっているだろう。SW又はPSWは、決して支援の枠に個人を当てはめるのではなく、個人声を積極的に聴くという姿勢が求められると考える。そうすることで、SW又はPSWは、新たな社会資源を構築することが出来、さらに誰もが住みやすい地域を住民と一緒に作っていくことが出来るだろう。

筆者が実習を終えて改めて考えた地域支援において大切にすべき軸とは、「1人1人がどのような地域生活を望んでいるのか、などの思いや考え

を聞き、そして寄り添うこと」である。また、事例で挙げさせて頂いた様々の分野において、ソーシャルワーカーが大切にされていることについて伺うと、どの分野のソーシャルワーカーも、「1人1人の考えや想いを尊重し、寄り添うことが大切である。」と話して下さった。

筆者は将来、1人1人の考えや思いを大切にして、個人個人に寄り添いながら、誰もが住みやすい地域を住民の方々と一緒に構築していくことが出来るような、そんなソーシャルワーカーになりたいと考えている。

## 注

- 1) 『社会福祉援助技術』 [www.asahi-net.or.jp/~uv3k-kmgi/enjo.html](http://www.asahi-net.or.jp/~uv3k-kmgi/enjo.html).
- 2) 法政大学大原社会問題研究所『社会福祉の原理と思想』 [oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/shohyo/iwasaki.html](http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/shohyo/iwasaki.html).
- 3) 社会福祉士養成講座編集委員会、『相談援助の基盤と専門職』, 中央法規, 2009年。
- 4) 『相談援助の基盤と専門職・科目共通・ソーシャルワーク史 ポイント6 ソーシャルワーク統合化とは 受験対策』 <http://miseki.exblog.jp/17040763/>.
- 5) 太田義弘・秋山蘇二編著、『ジェネラル・ソーシャルワーク』, 光生館, 1999年。
- 6) H. Mバートレット著, 小松源助訳, 『社会福祉実践の共通基盤』, ミネルヴァ書房, 1978年。
- 7) 丸山裕子訳, 『ソーシャルワーク論 I』, 講義録, 2010年。
- 8) 厚生労働省, 『精神障害者の退院促進』  
[www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/syakai/z.../gyousei04.html](http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/syakai/z.../gyousei04.html).

## 参考文献

- ・ H. Mバートレット著, 小松源助訳, 『社会福祉実践の共通基盤』, ミネルヴァ書房, 1978年。
- ・ 太田義弘・秋山蘇二編著, 『ジェネラル・ソーシャルワーク』, 光生館, 1999年。
- ・ 社会福祉士養成講座編集委員会, 『相談援助の基盤と専門職』, 中央法規, 2009年 144ページ～153ページ。